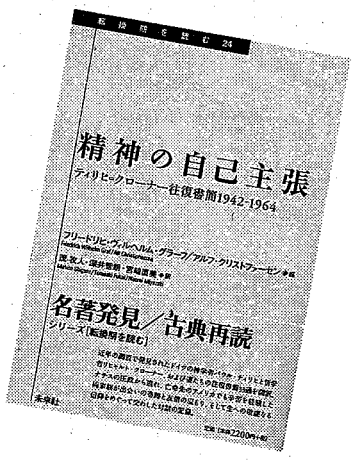
学術

ノンフィクション

限界から知る自由

運命の翻弄と高貴なる精神の静謐

森本あんり



フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ／
アルフ・クリストファーセン 編
茂牧人・深井智朗・宮崎直美 訳

▶精神の自己主張

ティリヒ＝クローナー往復書簡 1942−1964
11・15刊 四六判192頁 本体2200円
未來社

本書はティリヒとクローナーの往復書簡であるが、主人公は明らかにクローナーである。書名も、クローナー自身のヘーゲル的な著書『精神の自己実現』（一九二八年）を前提としていよう。複数の著者、複数の編者、複数の訳者が関わったこの小作品のうち、実際の往復書簡が占めているのは三部構成の第二部だけである。書簡原本はアメリカ東部の二つの大学図書館に所蔵されているが、それらを見ただけで一冊の本にまとめて出版しようと思う人は少ないだろう。何しろその内容は、人生の黄昏を迎えた二つの魂が交わした家族的な書簡で、誰それが風邪を引いただの、金婚式に出席できるかどうかだのという、ごく日常的な会話が続くだけなのだから。

もちろん、なかにはいくつか注目すべきエピソードもある。たとえば、「本はもう何も読まないことにした」というティリヒに、クローナーがせめて『ドクトル・ジバゴ』は読むといい、と勧めたことや、ティリヒを招待した日本が法外な大盤振る舞いをしたので、夫妻はその謝礼でついでに世界一周旅行をしたことなどである。最晩年にティリヒはシカゴへ移り、そこで宗教学者エリアーデと共同演習を行っているが、それは何の講義も準備することなく、来た学生の質問を受けて自由に答えるだけのお気楽な授業だった、というのも読んでいて愉しい。

だがそれらはすべて、クローナーという精神が「内面の運命」を翻弄する時代の後に、ようやく達することのできた、柔らかな晩年の陽光のぬくもりを物語っている。そのことを圧倒的な事実の重みとともに解説してくれるのが、編者による第一部と訳者による第三部である。

一八八四年に生まれたクローナーは、弱冠二四歳で学位を取得し、浩瀚な哲学史の名著『カントからヘーゲルまで』を出版するが、やがて勃興した反ユダヤ主義に絡め取られて次々に教授職への道を閉ざされてゆく。自らはすでにギムナジウム時代にプロテスタントに改宗していたにもかかわらず、そして第一次大戦では四年間も兵役に服して受勲したにもかかわらず、彼の運命を支配したのは「血」であった。「いかなる償いによっても埋め合わすことのできない」この不正は、三三年の国家社会主義革命で最後の抑制を捨て去り、公然とドイツの大学と学問を侵蝕するようになる。

とりわけ読む者の息を詰まらせるのは、彼とマールブルクの員外教授席を争ったハイデガーの非学問的な反感とどす黒い悪意に満ちた嘲笑である。知性と悪意は、かくまで相反する力として一人の人間のうちに共存できるのか。哲学の深遠な思索は、人格の誠実さに対する疑義とどこまで無関係であり得るのか。そもそも、自己への振り返りを内包するはずの知性が傲慢であるということは可能なのか。

評者は、ごく最近別の文脈で同じ問いをバルトに抱いた。本書にも登場するバルトは、二〇世紀最大の神学者と言われ、ハイデガーにも深甚な影響を与えたが、同郷の朋友ブルンナーに対しては、ほとんど生涯にわたって居丈高で侮蔑的な態度を取り続けた。ある学問で歴史を画するほどの革命的な領野を開くことは、総じて人間がこの世界にもたらす善の多寡にどれほど貢献するのであろうか。これら斯界の権威を追いかける者は日本でも少なくないが、それは何でも一直線に序列化してその最高位を目指そうとする子どもじみた習性のあらわれなのではないか。クローナーやブルンナーに学ぶことは、それとは異なったところに到達や円熟の深みがあるのを知ることである。

やがてティリヒは一足先にニューヨークへと亡命し、かつて自分をドレスデンへと招いてくれたクローナーを、今度はティリヒが救い出してともにユニオン神学校で教えることになる。二人の往復書簡は、その頃から始まっている。クローナー自身も、哲学者から神学者へと変貌を遂げ、自らの信仰の決断を理性的に解明することを生涯の課題とするようになった。彼が最晩年に公刊した小著『自由と恩寵』は、その緊張ある思索の軌跡を豊かに証言してくれる。あるいはそれは、当初から彼の人生に組み込まれていたものが自らを展開させていった結果にすぎないのかもしれない。人は、はじめから知っていたものしか知ることはできないのだ。

ガダマーは、戦後ドイツを訪ねてきたクローナーのことを「本国ではとっくの昔に消えてしまった優雅な市民的教養の雰囲気を漂わせている」と評した後で、こう付け加えている。「これほどまでに苛酷な運命を生き抜いてきた人が、私たちの上で猛り狂った嵐にまったく襲われなかったかのように平静に見えるのは、何という悲劇的なパラドックスであろうか」。この言葉には、自分もその嵐に巻き込まれて「疑似ナチス」的になり、師の停職処分後を襲って講座の代行に就任したガダマーの、秘やかな安堵にくるまれた罪責告白が滲み出ているようである。

個人の生は、何ものにもかえがたい人格の尊さを顕す。と同時に、その一回限りの個的な生が歴史のある時点に発現したというその事実により、有限性の彼方にある超越の存在を指し示す。わたしも訳者たちも、そう遠くない将来に原著者たちと同じ齢を迎えることになるだろう。願わくはそのとき、恩寵のめぐりあわせに感謝しつつ、静かなぬくもりのうちにこのような会話を交わしたいものである。

（国際基督教大学・学務副学長）